



ウェルカム トゥ ダリ

2022年/イギリス映画
配給: キノフィルムズ/97分

2023 (令和5) 年9月9日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督: メアリー・ハロン
脚本: ジョン・C・ウォルシュ
出演: ベン・キングズレー/
パルバラ・スコヴァー/
クリストファー・ブラ
イニー/ルパート・グ
レイヴス/アレクサ
ンダー・ベイヤー

みどころ

ピカソは知っているも、1970年代のニューヨークで大活躍したというサルバドール・ダリは“20世紀で最もシュールな天才アーティスト”と聞かされても、誰も知らないのでは・・・？

したがって、「ウェルカム トゥ ダリ」と言われ、「ようこそ、いけない大人の遊園地（ダリランド）へ。」と言われても、本作のストーリー展開も、面白さも、私にはイマイチ。

ダリの助手となる美青年ジェームスの美しさは、かつての三田明以上だが、そうだからと言って一体何なの・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆20世紀で最も有名な画家は、私が思うに、スペインのピカソ。日本人なら誰でも彼の名前は知っているし、「ひまわり」や「ゲルニカ」等の彼の有名な作品も知っている。しかし、サルバドール・ダリって一体ダレ？

チラシによれば、サルバドール・ダリは「20世紀で最も偉大な芸術家の一人」で「柔らかな時計や変形した肉体など、常識を破壊する画期的な作品で人々の心を揺さぶり、人気と名声を獲得した」そうだが、私ははかろうじてその名前を聞いたことがあるだけで、彼の実績や生きざまは全く知らなかった。しかして『ウェルカム トゥ ダリ』と題された本作は、観客を「奇想天外なダリ・ワールド」に誘うものだそうだが、さて・・・？

◆チラシによると、ダリは「独特の口ひげと奇抜なスタイル、数々の尊大な名言で、現代におけるインフルエンサーのような存在として、常に人々の注目を集めていた」そうだが、その意味は、本作冒頭のTVでの彼のインタビュー風景を見ればすぐに理解できる。私は1974年4月に弁護士登録をし、今日まで49年間も弁護士生活を送ってきたが、ダリもポップカルチャー全盛期を迎えた1970年代のニューヨークで、ファッションや音楽、アートを時代の最先端に立って牽引していたようだ。

本作は、私が弁護士登録した年と同じ1974年に、ニューヨークのデュフレヌ画廊で働く若者ジェームス（クリストファー・ブライニー）が、ひよんなきっかけで個展を開く準備をしているダリ（バン・キングスレー）と出会うところから始まる。

舟木一夫が歌った『高校三年生』（63年）は私が中学3年生の時のヒット曲だが、彼の後に登場した「日本人離れした美しさを持った若者」と称された歌手が三田明だった。彼のデビュー曲『美しい十代』（63年）は、息継ぎもろくにできない下手くそな歌い方が目についたものの、その顔はたしかに美しかった。

◆しかし、本作に見るジェームスは三田明以上の美しい若者だったから、ダリはもちろん気性の激しい妻ガラ（バルバラ・スコヴァ）も一目で気に入ったらしい。今、そんな話を聞くと、思わず、ジャーニー喜多川氏の「性加害問題」を思い出してしまうが、どうやらジェームスとダリとの間にはそんな関係はなかったらしい。

ダリが常宿としている高級ホテルのスイートルームでは連日パーティーが開催されており、ジェームスはそこに出席していた美女（美男？）のアマンダ・リア（アンドレア・ペジック）と“いい仲”になっていくので、その展開に注目！しかし、連日連夜パーティーばかりやっていて、ダリは大丈夫なの？個展に出す作品は一体いつ描くつもりなの？

◆本作導入部を見ていると、誰でもそんな心配をしてしまうが、ダリはブチ切れてしまったガラの一言で反省（？）し、見事な集中力で作品を描き上げ、個展を大成功させたからさすがだ。その後、ジェームスはダリの仕事場で助手として働くことになった上、ガラとの仲も上々だから、万々歳！そう思ったが、いやいや・・・。

◆誰でも黄金時代は長くは続かないもの。しかして、本作ラストは、それから約10年後の1985年。病院内には既にガラに先立たれてしまったらしいダリが車椅子に座っていたから、その晩年はみじめなものだ。なぜ、そこにジェームスが訪れてきたのかよくわからないが、『ウェルカム トウ ダリ』と題された“ダリ・ランド”の結末は？

2023（令和5）年9月14日記